『エヽ妙な事をお訊ねいたしますが、唯今御當家へお這入りになりましたのは、どちらの旦那様でムりますやろ。』
『あヽお前處へ往きやはつたか。』
『ヘエお越し下さりましたので。』
『喜びや、福の神が舞ひ込んだ様な物や。最初駕賃取り替えやへなんだか。』
『あッ。よふ御存じで。ヘエお取り替え申しました。』
『なんぼやつた。』
『一兩と二兩。都合三兩で。』
『フム。夫れは六兩にして返して貰ふたやろ。』
『ヘエ〳〵左様でムります。』
『次は。』
『十兩。十五兩。二十兩。三十兩。』
『取り替えたんやな。皆倍にして返して貰ふたやろ。其あとは。』
「五十兩で。』
『フム、取り替えたか。』

『何分お顔を存じまへんので……。』
『あッ。斷つたか。やれ〳〵可哀想に。モウあかんワ、早ふ歸り。』
『何故だすネ。』
『モウお前とこ失敗つてるがナ。阿呆やなア、そこをもう一遍とり替えて見い。ウム腹の太い面白い奴やと成る。今度往きなはる時には、お前とこの襖が何枚有るか知らんけれど、スツカリ小判で張り詰めて貰えるのや。お添に附いてお世話申したのはお前か。フームよく〳〵運の無い男やなア。失敗らなんだら此次お越しに成つた時。新らしい四斗樽の中へお前を坐らしてナ。周圍を小判でギツシリ詰めて呉れはるのや。其上頭から千兩箱を一つソツと乘せて貰える。オイ確かりせえ。お前小判の漬物に成り損ふたんやで。』
『えヽー。一態あのお方はんは。』
『知らんのかいナ。御當家妹御前のお嫁入先。和泉の暴れ旦那や。』
『ギエッ。飯さんだすか。』
『左様や。』
『フワー。』
『何ぢやい〳〵。何ふしたんやいナ。』